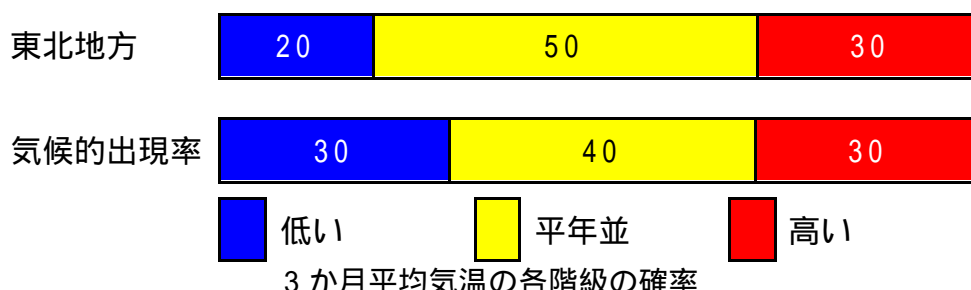


# 東北地方 3 か月予報（4～6 月）の解説

平成 12 年 3 月 21 日 仙台管区气象台

## 1. 予想される天候

（1）3 か月平均気温の予想される各階級の確率（％）



### [ 概要 ]

4～6 月の 3 か月平均気温は、「平年並」の可能性が最も大きく、その確率は 50%です。「高い」の可能性が次ぎに大きく、その確率は 30%です。「低い」の可能性は小さく、その確率は 20%です。

（2）可能性の大きな天候の特徴

	4 月	5 月	6 月
気圧配置	低気圧と高気圧が交互に通る	低気圧と高気圧が交互に通る	梅雨前線や低気圧 オホーツク海高気圧
天 気	天気は数日の周期で変わりますが、気温の変動が大きいでしょう。 高気圧に覆われ、東北日本海側は平年に比べ曇りや雨の日が少なく、東北太平洋側では平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	天気は数日の周期で変わりますが、気温の変動が大きく、晩霜の恐れがあるでしょう。 東北地方は、平年と同様に移動性高気圧に覆われ晴れの日が多いでしょう。	東北日本海側は平年と同様に天気は周期的に変化しますが、ぐずつく時期があるでしょう。東北太平洋側は平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。また、オホーツク海高気圧の影響を受けやすく、気温の変動は大きい見込みです。
気 温	平年並	平年並	平年並
降 水 量	東北日本海側 少ない 東北太平洋側 平年並	平年並	平年並

なお、4～6 月の 3 か月間の降水量は「平年並」の可能性が大きいでしょう。

### < 参考資料 >

平年のおおよその天気出現割合（％）

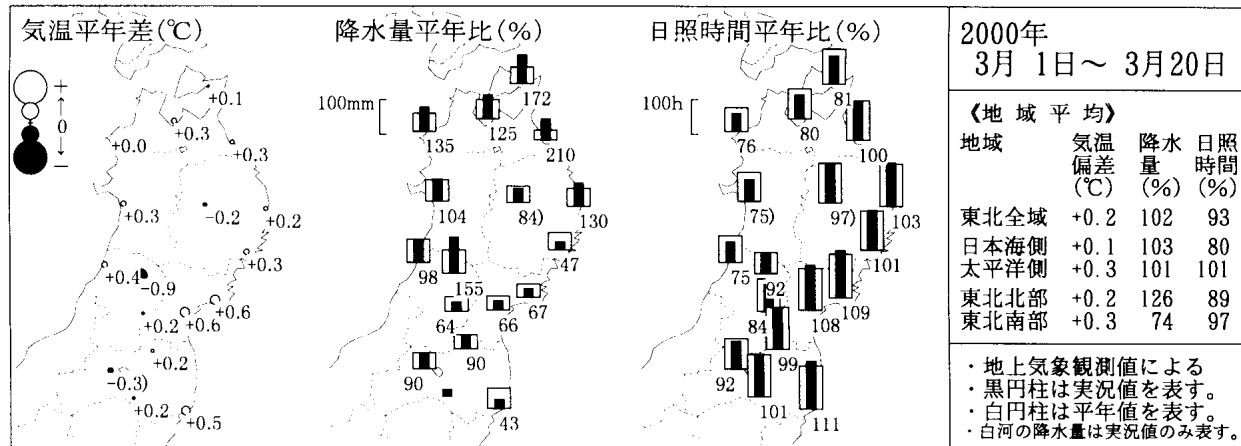
	4 月		5 月		6 月	
	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側
晴れの日	60	64	61	62	52	47
雨の日	35	29	32	29	35	35

注：季節予報では、「日照率 40%以上の日数」、「日降水量 1mm 以上の日数」を晴れの日、雨の日の目安として用いている。この 2 つの事象は同じ日に起こりうるため、両方に数えられる日もある。日照率は、1 日の日照時間を可照時間（太陽の中心が東の地平線に現れてから西の地平線に没するまでの時間）で割った値である。

## 2. 前回(2月21日)発表の3か月予報からの変更点 なし

## 3. 最近の天候経過と循環場の特徴

### (1) 最近の天候経過



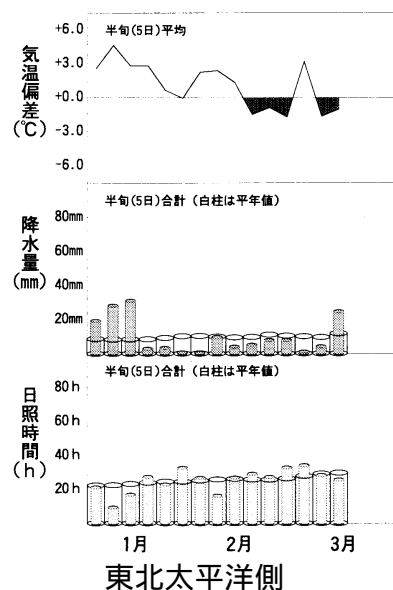
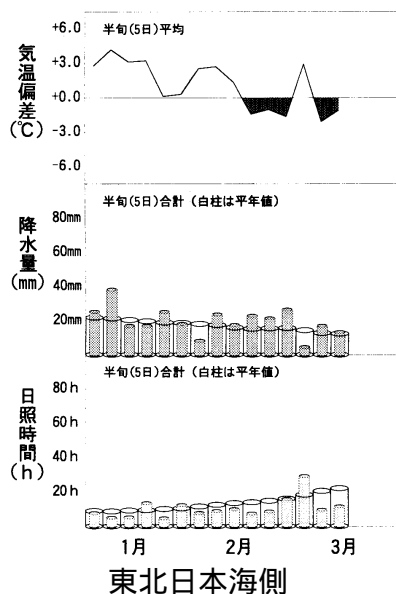
東北地方における3月(1～20日まで)の平均気温、降水量、日照時間平年差(比)

3月(20日まで): 上旬は、4日に気圧の谷が通過したが天気のおくずれは小さく、移動性高気圧に覆われ晴れて暖かい日が続いた。しかし、7日に寒冷前線が通過した後は冬型の気圧配置が続き、東北日本海側を中心に曇りや雪となって、気温も平年を下回るようになった。東北太平洋側は概ね晴れた。旬平均気温平年差は+0.5 と平年並、旬降水量平年比は46%とやや少なく、旬日照時間平年比は107%とやや多かった。

中旬は、天気は周期的に変わり、気圧の谷の通過後は冬型の気圧配置となることが多かった。16日は本州南岸を発達しながら進んだ低気圧の影響で、降雪の深さの日合計が盛岡26cm、宮古19cm、仙台21cm、福島18cmとなるなど東北太平洋側を中心に大雪となった。また、19日には日本海を低気圧が進んだため、南から暖かい空気が入り込んで気温が上がり、中旬は気温の変動が大きくなった。旬平均気温平年差は-0.1 と平年並、旬降水量平年比は169%とやや多く、旬日照時間平年比は80%とやや少なかった。

この期間の平均気温の平年差は、+0.2 と平年を上回った。降水量は、東北北部で平年比126%と平年を上回り、東南北部で平年比74%と平年を下回った。日照時間は、東北日本海側で平年比80%と平年を下回ったが、東北太平洋側で平年比101%と平年を上回った。

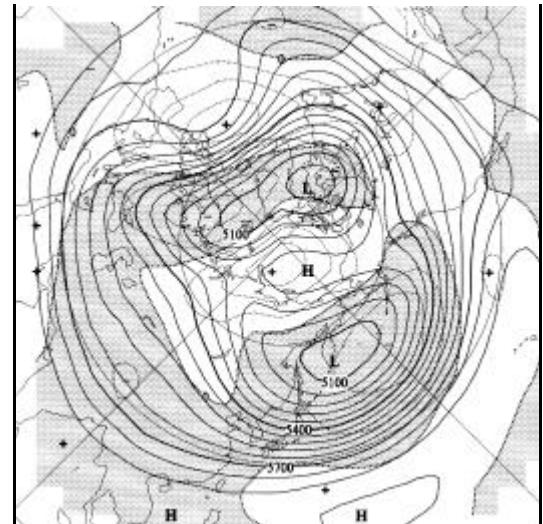
### 半旬経過図



## (2) 中・高緯度の循環

3月(20日まで): 極渦は、ハドソン湾(カナダ)の北とカムチャッカ半島付近にあって、東経90度付近やアラスカから北極海にかけては気圧の尾根となっており、寒気放出期となった。日本付近は、ベーリング海に中心をもつ負偏差域に弱いながら覆われ、東経90度付近が正偏差となって、2月から引き続いて大陸から寒気が流れ込みやすい気圧配置となった。

ただし、20日までの東北地方の平均気温平年差は+0.2となっている。



3月1～20日平均500hPa天気図  
等高線間隔60m

陰影部は平年より高度が低い領域

## (3) 熱帯太平洋の状況

エルニーニョ監視海域(北緯4度～南緯4度、西経150度～西経90度)の2月の海面水温偏差は、-0.9であった。2月の太平洋赤道域の海面水温は、東経165度から西経120度にかけて平年より1以上低かった。一方、東経150度以西では+0.5以上の正偏差が見られた。

2月の南方振動指数は+1.1であった。

(南方振動指数は貿易風の強さの目安であり、正(負)の値は貿易風が強(弱)いことを示す。)

エルニーニョ監視指数

エルニーニョ 監視海域	1999年											2000年	
	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	
月平均海面水温( )	26.8	26.7	26.4	25.5	24.8	24.0	23.8	23.6	23.2	23.4	23.8	25.3	
平年偏差( )	-0.1	-0.4	-0.2	-0.6	-0.4	-0.6	-0.8	-1.0	-1.4	-1.5	-1.6	-0.9	
5か月移動平均( )	-0.5	-0.4	-0.3	-0.5	-0.5	-0.7	-0.8	-1.1	-1.2	-1.2			
南方振動指数	+0.8	+1.8	+0.3	+0.1	+0.6	+0.0	-0.1	+1.1	+1.1	+1.5	+0.4	+1.1	

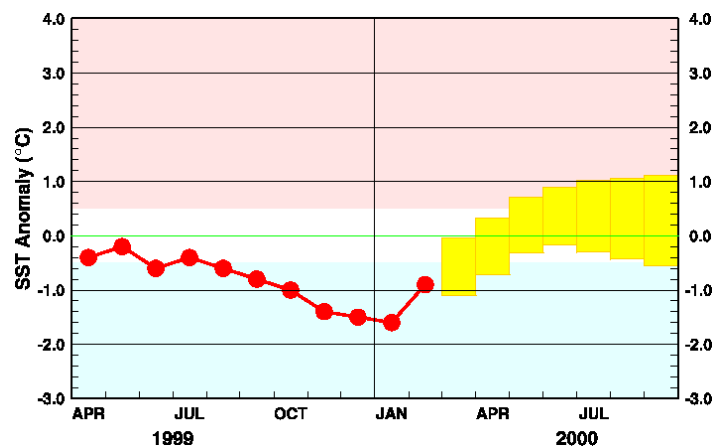
注: 海面水温の平年値は、1961～1990年の30年平均値である。

## (4) エルニーニョ監視海域の海面水温の今後の見通し(2000年3月～2000年9月)

エルニーニョ監視海域の海面水温は、今後次第に平年値に近づき、夏以降は、平年並で経過すると予測される。現在発生しているラニーニャ現象は、夏までには終息するとみられる。

### 【解説】

エルニーニョ予測モデルによれば、監視海域の海面水温は今後次第に平年値に近づき、夏以降は平年並またはやや高めの状態に移行する予測結果を示している。南方振動指数が+1.1と先月に比べて高くなり、また、海洋内部でも依然としてラニーニャ現象の特徴を示しているが、監視海域の海面水温は、今後次第に平年値に近づくと予測され、ラニーニャ現象は、夏までには終息するとみられる。夏以降の監視海域の海面水温は、ほぼ平年並で経過すると考えられ、予測モデルはやや高めの海面水温を予測しているものの、過去の予測実験の結果などを考慮すると、予測期間内にエルニーニョ現象が発生する可能性は低いとみられる。



エルニーニョ予測モデルによる  
エルニーニョ監視海域の海面水温偏差予測